

奈文研本庁舎敷地の遺構表示



今年、奈良文化財研究所の本庁舎が無事に完成し、2018年6月20日に竣工記念式典を挙行了しました。その後、この庁舎の建て替えにともない、本格的な発掘調査をおこないました。その結果、平城京造営に関わる大なり、敷地内にその遺構を表示することになりました。

奈文研の本庁舎が建っている場所は、平城宮の西面中央に開く佐伯門の正面にあたります。奈良時代には、に交差し、右のイラストに見られるような風景が広がっていました。

本庁舎の設計にあたり、佐伯門の真向かいに正門を配置し、そこからエントランス棟の正面入口にいたりました。路面の範囲は濃灰色の切石で舗装し下草のスリットを入れました。路面の南北には排水のための査で確認しましたので、これらを白色の玉石敷で表現しました。

西一坊大路も敷地内に含まれ、こちらの路面も濃灰色で舗装しました。側溝については西側溝のみを玉石位置にあたります。この土塁は既に整備されていた平城宮跡西辺の境界土塁の意匠にあわせて1980年に凝灰敷地の南部では西一坊大路の雰囲気を出すために、奈良時代にも街路樹として使われていたエンジュと、対のサクラは平城宮跡内のサクラ並木との連続性を意図したものです。

敷地内の表示と佐伯門の基壇整備を手掛かりに、1300年前の平城京の風景を想像してみてください。



9月に移転がおこなわれ、10月から本格的に運用を開始しました。規模な土木工事の実態や造営後の当地の利用のあり方等が明らかに

一条南大路と西一坊大路という縦横の条坊道路が佐伯門の前で丁字形アプローチを利用して、実際の大きさと位置で大路を再現することと側溝が掘られており、両者をつなぎ路面を南北に横断する溝も発掘調

敷等で表示しました。東側溝の位置は敷地東辺の生垣を施した土塁の岩切石積で整備したものです。

アラカシの高木を側溝の表示に沿って並木状に植えました。正門の一

(文化遺産部 エマニュエル・マレス)

